

プロローグ 豊橋応援隊始動！

愛知大学前駅からほど近い、県立ツワブキ高校。
歴史を感じさせる校舎の片隅に、文芸部の部室があった。

——ある日、部室に呼び出された俺たち4人の1年生に向かって、3年生の月之木京都がキラリと眼鏡を光らせた。

「集まってもらったのは他にもないわ。みんなに頼みたいことがあるの」
「頼みごと、ですか？」

俺が聞き返すと、先輩がコクリとうなづく。

「実は生徒会に記事を依頼されてたんだけど、すっかり忘れててさ。みんなにちょっとばかり手伝ってもらおうかなって」

……生徒会が俺たちに？ なにか裏でもあるのではなかろうか。
俺は即答を避け、チラリと隣に目をやる。

視線の先、おぐらサンドをモシヤモシヤと食べているのは八奈見杏菜。
俺の視線に気付くと、八奈見はパンの残りを一気に口に放りこむ。

「手伝ってあげればいいじゃん。温水君、どうせ暇でしょ？」
「八奈見さんも手伝うんだよ？ 分かってる？」
「分かってる分かってる。温水君、パンの耳あるけど食べる？」

食べないし、多分こいつ分かってない。
俺が考え込んでいると、正面に座る焼塩檸檬が小麦色に焼けた手を上げた。

「はい、あたし手伝うよ！ 先輩、何を書けばいいんですか？」

ようやく出た好意的な言葉に、月之木先輩がホッと胸をなでおろす。

「豊橋市との産学連携の取組みで、豊橋応援隊として地元を盛り上げようってプロジェクトがあってね。みんなには街を取材して、豊橋の魅力を伝える記事を書いて欲しいの」



へえ、そんなまともな企画なんだ。
月之木先輩の頼み事だから、すっかり疑っていたぞ。

「面白そうですね。それで締め切りはいつですか？」
「今日よ」

……今日。

にわかに張りつめる部室の空気。
部室の隅で本を読んでいた小鞠知花が、困惑しながら顔を上げる。

「せ、生徒会に謝って、許してもらおうとか」
「無理ね。そもそも私がやらかした不祥事を許してもらい代わりに引き受けたから」

じゃあこの人が全部書けばいいのでは……？
思うが口には出さない。こんなんでも先輩なので。

「ええと、取材ってどこに行けばいいんですか」
「私たちに任されてるわ。実際に豊橋に住んでいる君たちが、読者に魅力を伝えたい場所を選んで欲しいの。つまり——みんなのセンスが試されるってことね」

……ほう、センス対決ということか。
さり気なく視線をめぐらすと、パンの耳をかじる八奈見と目が合う。
センスに自信はないが、こいつには勝てそうな気がする。なんとなく。

さて、まずは話題の多い、映えるスポットを押さえないと——
と、八奈見がパンの耳を高く掲げる。

「じゃあ私、カルミアを取材してきます！」
「っ！」

まずい、本命スポットをとられたぞ。
カルミアは豊橋駅の駅ビルだ。書店にアニメショップにガチャガチャと、俺たちに必要なものが大体そろっている。

俺が悔しがっているのを見て、八奈見がニヤリと笑みを浮かべる。



「悪いね、温水君も狙ってたんでしょ。ちょっと小腹空いてるから、おやつでも買いに行こうかなって」

言いながら、袋に残ったパンの耳をザラザラと喉に流しこむ八奈見。
こいつ、パンの耳を喉で味わってやがる……。

半ば感心しながら眺めていると、焼塩が両手をズバッと上げた。

「じゃああたし、のんほいパークを取材してきます！」
「お、焼塩ちゃんヤル気だね」

相次ぐ参加表明に嬉しそうな月之木先輩。
のんほいパークは豊橋駅から一駅、二川駅近くの総合動植物公園で、遊園地や博物館まである一大スポットだ。

「焼塩、ここからのんほいって結構離れてないか？」
「ここから走れば20分くらいだよ。天気もいいからちょうどいいかなって」

俺なら自転車でその倍はかかるけど、焼塩は半分野生動物みたいなもんだしな……。
と、話の流れを見守るように黙っていた小鞠が、おずおずと手を上げる。

「わ、私は駅前の精文館書店を取材して、くる。ほ、欲しい本の発売日だし」
「それ普通に買い物だろ」

思わず突っ込んだ俺を、小鞠がジロリと睨んでくる。

「り、リアルな豊橋市民の生活感を大切にしている、から」

小鞠の反論に、月之木先輩が腕組みをしながら大きく頷く。

「市民視点はこの企画に不可欠よ。じゃあ私は、まちなか図書館に行こうかな。予約した本が届いたって連絡があったし」

「……せめて先輩くらいは、やる気を見せてもいいんですよ？」
「そこはアレよ。市民の視点がアレでアレだし、問題ないわ」

この人、取りつくろう気も失せたらしい。



と、空になったパンの袋をジッと見つめていた八奈見が、ゆっくりと顔を上げる。

「じゃあ温水君はどこに取材行くのさ」

「え、俺は——」

「それだけ言うんなら、誰もが思いつかなくて、豊橋の魅力にあふれたスポットを取材してくるんだよね？ ね？」

こいつ、食べ物が無くなると機嫌が悪くなるな。

だけど、カルミアとのんほいパークの2大スポットは取られたし……。

「じゃあ俺は——ときわ通りでも取材してこようかな」

「精文館の隣じゃん」

「ちょうど今日、妹がときわ通りのコーヒーショップで職場体験してるんだって。せっかくだからコッソリ見に行こうかなって」

「えっ、そんな堂々と公私混同する？」

……だって気になるんだもん。

八奈見のジト目から顔を逸らしていると、月之木先輩がパンパンと手を叩く。

「うん、これで頼まれた6本の記事が書けそうね。今日は午後から授業は無いから、さっそく取材に向かおうか」

「あれ、取材場所は5か所ですよ。記事が6本なら一か所足りなくないですか」

「みんなが書いた記事を少しずつ削って、1本でっち上げようと思ってたんだけど」

いや無理だろ。

だが締め切りは今日だし、それもやむ無しか……？

心の天使と悪魔を戦わせていると、部室の扉がバタンと開く。

「——古都先輩、それは聞き捨てなりませんね」

颯爽と部室に入ってきたのは、ツワブキ高校生徒会長の放虎原ひばり。

長いストレートヘアをなびかせ、鋭い眼光を月之木先輩に向ける。

「放虎原！ どうしてここにいるの？」

「それは今日が締め切りだからです」



うん、もっともだ。

さすがに焦る月之木先輩を見て、会長はヤレヤレと首を横に振る。

「連絡が付かないから、こんなことだろうと思いました。仕方ありません、生徒会からも手伝いを出しましょう」

放虎原会長がパチンと指を鳴らす。

背後に暗い影が立ちのぼり、昼間にもかかわらず部室が薄闇に包まれた。

フラつく足取りで姿を現したのは、生徒会書記——志喜屋夢子。

歩く屍系女子のギャル先輩だ。

「悪いな志喜屋、頼まれてくれるか」

「うん……私……そういうの……得意……」

志喜屋さんはなぜか俺の前に立つと、白いコンタクト越しに俺をジッと見つめてくる。

「私はどこに……取材に行けば……いい……？」

え、俺が決めるの？

他の部員に視線で助けを求めるが、みんな素早く目を逸らす。

「えーとじゃあ……どんな場所が好きとか、興味があるとかありますか？」

「暗くて……地面の中が……いい……」

お墓かな。

確かに志喜屋さんに似合うが、墓地巡りをするわけにもいかないよな……。

「あ、それなら地下資源館はどうですか。地下だし、ちょっと暗いし」

「うん……名案……」

無表情のままカクリとうなずくと、志喜屋さんはフラフラと部室を出ていく。怖い。

「それではこれで解決ですね。古都先輩、記事を楽しみにしていますよ」

そんな微妙な雰囲気の中、放虎原会長は明るく笑うと踵を返す。



生徒会の二人が去った部室には、文芸部員5名が残された。
月之木先輩が苦笑しながら立ち上がる。

「とりあえずさっそく動きましょうか。それじゃ、豊橋応援隊始動！」
「「おーっ！」」「お、おお……」

八奈見と焼塩が掛け声を上げ、その後ろで小鞠がモソモソと呟く。
と、八奈見が俺をヒジでつついてくる。

「温水君、掛け声は？」
「俺、そう言うの苦手だし。ほら、早くカルミアに行かないと食べ物が売り切れるよ」
「そうだ、限定のピレーネ買わなくちゃ！ ほら、温水君早く行くよ！」
「いや俺、ときわ通りに取材に行かないと」

腕を引っ張る八奈見から逃れようとしていると、反対側の腕を焼塩がつかむ。

「ぬっくん、のんほいまで競争しよっか！ なんなら県境越えでもいいよ！」
「行かないし、行くなら電車使うし——って、俺は反対方向なんだけど？！」

厄介娘たちからまれていると、小鞠がカバンを肩にかけながら俺を睨む。

「……も、もげろ」

小鞠は俺をジト目で見ながら部室から出ていく。
俺のなにがもげろというんだ……。

八奈見は「あー、お腹空いた」と言いながら一口羊羹食べてるし、焼塩は手ぶらで走りだそうとして月之木先輩に止められてるし——こいつらちゃんと取材するんだろうな。

後で様子を見に行かないと……。
俺はコッソリ溜息をつきながら、部室を後にした。

